＜令和２年９月地域合同運動会＞

子どもが変わった！

－コミュニティ・スクールだからできる「いつまでも幸せにくらす」ために－

岩国市立柱野小学校

Ⅰ　はじめに

「これまでも　これからも　地域と共に」という横断幕を掲げたのは、昨年「学校創立 140 周年記念式典」を行ったときのことだった。長年、地域に愛され、育てられた学校で、子どもたちは、安全・安心な環境のもと、健やかな成長を見せている。

しかしながら、現在児童数は 12 名に減少し、地域住民は 500 人となり、少子高齢化が進んでいる。その中で、子どもも保護者も地域の人々も、「いつまでも幸せにくらしたい」という住み慣れた土地で豊かな生活を送ることができる持続可能な地域社会を望んでいる。

この現状を踏まえると、子どもや地域の人々の願いを共有し、課題解決の原動力となるのが学校の役割ではないかと痛感している。地域に支えられた学校であるからこそ学校への期待も大きい。また、学校を核とした地域活性化への取組も求められている。

Ⅱ　取組の概要

１　目的

児童数の減少や高齢化の進行といった課題を、子どもや家庭、地域が一体となり、その解決を探る取組を推進していく。また、取組をとおして、豊かな生活を送ることができる持続可能な地域社会の創り手となる子どもの育成を図っていく。

２　方法

研究の推進に当たり、主にコミュニティ・スクール（以下コミスク）の仕組みを活用し、地域課題の解決に向けた取組につなげる。そして、学校教育目標や経営方針、教育課程に地域連携を明確に位置付けるとともに、子どもたちの主体的な活動を促す教育活動を展開していく。

３　取組の実際

(1)学校経営方針への位置付け

学校教育目標を『進取な志をもち　たくましく　ふるさとにいきあう　柱野っ子の育成』と掲げた。

＜進取な志＞

創造力や目的意識、粘り強さ（自己肯定感）

＜たくましく＞

自己や他者のよさの認識、協働（他者肯定感）

＜ふるさとにいきあう＞

地域へ「行き逢う」、地域と「意気合う」（地域肯定感）

＜柱野っ子の育成＞

校風や風土を実感、愛校心やふるさと愛

以上のような意味を込め、長年培われた校風を活かし、地域一体となった取組を推進する。

(2)コミスクの機能活用

①子どもや地域への周知

まず、全校朝礼や行事を活用し、学校として、毎年年度初めに子どもたちにコミスクの組織や役割について説明をする機会をもった。1 年間の活動やその成果についてパワーポイントを使って語っていく。

＜子どもに語る(集会)＞

＜地域に説明(学校運営協議会)＞

子どもたちは、日々の楽しい教育活動が地域に支えられていることを実感していく。

家庭や地域には、学校運営協議会やＰＴＡ懇談会などの機会に話をした。その結果、学校支援の確立やコミスクの成果、子どもの成長への喜びなどを感じ取ることにつながった。

②子どもがコミスクを発表

コミスクが始まり７年目を迎え、子どもたちもコミスクを理解し、その支援に感謝の気持ちが高まり、地域に積極的に目を向けるようになっていった。その活

動例を紹介する。

【運動会でのコミスク紹介】

地域の人が多く集まる行事である運動会を活用し、子どもたちがコミスクの仕組みやコミスクへの思いを語った。

弁当時間に、総理大臣賞受賞報告やコミスクによる活動、感謝の気持ちなどを発表した。同時に、下級生は自作のコミスクパンフレットを配布していった。

＜説明の様子(弁当タイム)＞

子どもたちのうれしそうな顔が印象的だった。

（前略）
ここで、柱野小学校コミュニティ・スクールの紹介をします。コミュニティ・スクールとは、地域や保護者の方々と先生方で作る学校運営協議会がある学校のことを言います。1年間で 6 回の会議を開き、教育活動について、話し合いを行っています。また、私たちの授業も見ていただいたり、一緒に教室で勉強したりしています。（中略）
私は思います。いつも家族や地域の方々が登下校の見守りをしてくださったり、授業や行事で学校に来てくださったり、いつも私たちのそばに大人の人がいてくれ、声をかけてくれるから、すごく安心します。いつも地域の人に守られているんだなと思います。
このように、私たちの勉強や運動、そして心の安心を与えてくれるコミュニティ・スクールによる学校に通っている私たちは、幸せだなと思います。これからは、お世話になった皆さんのために、私たちができるとこを考え、学校も地域も家族のみんなも元気で幸せが増える取組をしたいなと思います。そして、私たちや家族、地域の皆さんが誇りとする学校「大好き！柱野小学校」をめざし、がんばります。（後略）

＜子どもが語った文面(抜粋)＞

＜配布したパンフレット(一部)＞

＜地域合同記念写真(運動会)＞

【学校創立 140 周年記念式典での紹介他】

記念式典では、児童を代表して 6 年生がコミスクによる教育活動の紹介や地域への感謝の気持ちを述べた。また、柱野太鼓の演奏やふれあい活動、卒業生（プロ歌手）によるライブを行った。

子どもたちは、地域に支えられた教育活動や、長く伝統のある学校への愛着心や誇りを感じていた。さらに、学校や自分たちが地域にできること、貢献することなどを考えるきっかけとなっていった。

＜式次第(抜粋)＞

〇校歌斉唱

〇アトラクション

・コミスク紹介「学校や地域への思い」発表
・卒業生ライブ(ふるさと合唱など)
・柱野太鼓の演奏
・ふれあいゲーム（子どもが準備、運営）

＜式典の様子＞

＜卒業生ライブの様子＞

『柱野太鼓』は、30 年以上の伝統があり、地域講師のもとに練習を重ねている。行事等で広く演奏し、地域に元気を与えている。

＜←太鼓演奏の様子)＞

コミスクの成果を発表
・自己肯定感(自己の成長)
・他者肯定感(思いやり)
・地域肯定感(ふるさと愛)
・キャリア(夢)

＜コミスク発表の様子→＞

＜プレゼンテーション画面(一部)＞

③子どもがコミスクを活用

子どもたちは、コミスクを知り、コミスクを語り、今度は、コミスクを動かす、コミスクに働きかける活動へと進化していく。

自分たちの学び舎のある地域が抱える課題、そして学校の課題について、子どもたちがその解決策を提案していく。学校や地域のピンチを、子どもたちの主体性やふるさと愛を育むチャンスに変える取組となっていると確信する。ここで、柱となる取組を紹介する。

【未来へ！師木野『しあわせ総会』の取組】

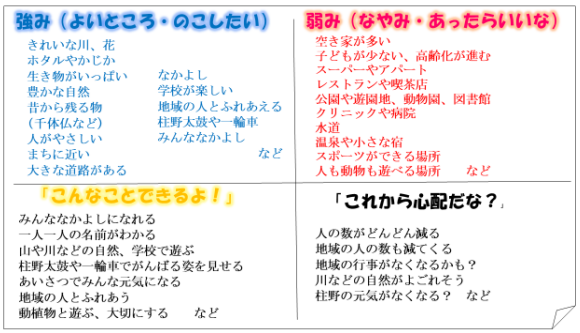
※校区名（3 地域の文字をとり、師木野地域と呼ぶ）

↓ 保護者や地域の方々との熟議(参観日)

議題:「師木野地区を幸せいっぱいに！」

内容: SWOT分析「よいところ、ないもの（あったらよいもの）、できること、今後心配なこと」

＜学校(子ども、教職員)、家庭、地域による熟議の様子＞



強み（よいところ・のこしたい）

きれいな川、花
ホタルやかじか
生き物がいっぱい　なかよし
豊かな自然　学校が楽しい
昔から残る物　地域の人とふれあえる
(千体仏など)　柱野太鼓や一輪車
人がやさしい　みんななかよし
まちに近い　など
大きな道路がある

弱み（なやみ・あったらいいな）

空き家が多い
子どもが少ない、高齢化が進む
スーパーやアパート
レストランや喫茶店
公園や遊園地、動物園、図書館
クリニックや病院
水道
温泉や小さな宿
スポーツができる場所
人も動物も遊べる場所　など

「こんなことできるよ！」

みんななかよしになれる
一人一人の名前がわかる
山や川などの自然、学校で遊ぶ
柱野太鼓や一輪車でがんばる姿を見せる
あいさつでみんな元気になる
地域の人とふれあう
動植物と遊ぶ、大切にする　など

「これから心配だな？」

人の数がどんどん減る
地域の人の数も減てくる
地域の行事がなくなるかも？
川などの自然がよごれそう
柱野の元気がなくなる？　など

＜熟議で出てきた意見(SWOT 分析)＞

↓ 自分たちができることを協議（全校集会）

議題:「学校や地域の課題を解決するぞ！」

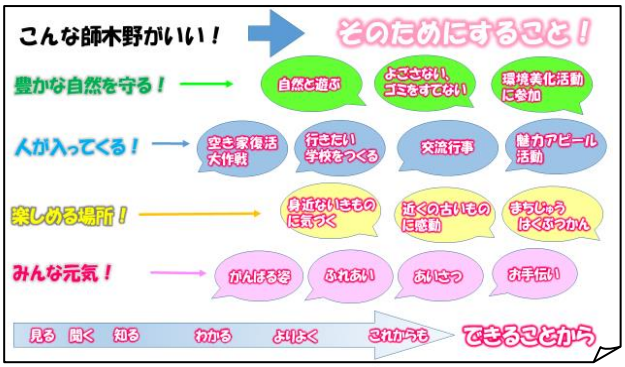
内容:熟議の結果を見ながら、全校での取組を考える。

↓ 自分たちができることを発表（学校運営協議会及び学校公開日）

議題:「いつまでも幸せにくらすために！」

内容:自分の思いや全校での取組、協力お願い等について発表する。

＜子どもの発表の様子→＞



＜子どもたちの意見内容(パワーポイント抜粋)＞

熟議により、学校が抱える課題（児童数の減少）、地域の課題（高齢化）が明らかになり、その解決への取組がみんなで共有された。子どもたちは、自分たちの立場でできることを考えていく。地域にないものをつくるのではなく、地域にあるもの（自然や文化・歴史）を活かし、楽しんでいく、そして大切にしていく考えに至った。たとえば、動物園や公園がないのなら、身近にいる生き物に目を向け、自然とのふれあいを深め、楽しむといった考えである。これらの活動をとおして、ふるさとのよさを発見、活用、継承などの考えや未来のふるさとへの思い、ふるさとに働きかけようとする姿勢が見られたことが成果としてあげられる。

(3)教育活動での取組

①教育課程への位置付け

熟議を受け、学校・地域連携カリキュラムの見直しを行った。検証改善については、保護者や地域住民だけでなく子どもと一緒に考える場を設け協議を行った。

地域の教育資源「ひと・もの・こと」の活用促進、教科横断的な学習の展開、６年間の見通しや小中一貫教育との関わりなどの観点を確認した。このカリキュラムの実施については、子どもの主体性を促す活動に重点をおくことが大切と考えた。

②教科による主な取組

【ふるさとの過去・現在・未来】

○災害史を調べる(6 年･総合的な学習の時間)

○「安全・安心マップ」づくり(6 年･社会科)

○30 年後の未来のまち(4 年･総合的な学習の時間)

○『まちじゅう動物園』マップ(3 年･社会科)

地域の自然や生き物、文化財を活かした動物園や博物館を創造して、マップに表した。ふれあいコーナーや観察コーナー、体験ゾーンなどがある。

＜子どもの作品→＞

○まちのうつりかわり(3年・社会科)
○学校の昔たんけん(3年・総合的な学習の時間)
○地域でがんばっている人紹介(5年・総合的な学習の時間)
　ふるさとを題材とした調べ学習や発展的な学習をとおして、まさに「ふるさとで知るもの感じたことが、ふるさとのよさに変わる」といった子どもの意識変容が伺われた。また、教職員にも、「学校や地域の課題解決のために」という「何のためにやるのか」の明確な目的意識があるので、ふるさとの教育資源を活用した深い学びや広げる学びへ展開していくことが多くなったと感じる。

③行事等による主な取組

○『柱野カルタ』の作成と活用
　ー地区内に残る文化財や遺跡、昔話や逸話など自然や歴史・風土に関わるカルタを作成し、地域の方々と行事などでふれあっている。

＜柱野カルタ＞

＜ふれあい活動の様子→＞

○『子どもガイド』の実施
　ーふるさとのよさを観光客に紹介する活動で、名勝地である錦帯橋で実施した。

＜ふるさと紹介をしている様子(錦帯橋)＞

○地域ボランティア活動や地域行事への参加
　ー学校行事として復活した「とんど祭り」

＜とんど焼きの様子＞

＜巨大柱野カルタ大会＞

　行事や児童会等を活用することは、子どもの考えや思いが表出しやすくなり、楽しみながら取り組むことができた。後日、児童会提案の「登校時のゴミ拾い運動」が始まった。そして、アウトプットに働きかけるきっかけつくりにもなった。

④子どもの活動を支援する主な活動

○柱野紹介・移住促進
　ホームページ作成(PTA)

＜HPトップ画面→＞

○空き家情報紙作成(地区社協)
○母校応援ー学習や行事、清掃活動等に参加(卒業生)
○日々の見守りや外部講師(学校ボランティア)
　子どもたちの思いや行動は、学校運営の活性化や地域を動かす原動力となる。学校の役割をあらためて感じることができた。

Ⅲ　成果と課題

　児童数の減少や高齢化という学校や地域の危機感から、熟議をとおして、自分たちにできることを考え、様々な行動に移していく。これらの活動から以下のような成果や課題が見られた。

【成果】

○　自分たちが住んでいる地域の現状や課題を話し合うことで、ふるさとをさらに知ることができた。
○　未来のふるさとを創造することで、残したいものや大切にしたいもの、今あるもので楽しむという考えが生まれ、積極的にふるさとに働きかける姿勢が見られた。
○　大人と課題を共有し、心がつながることで、地域の学校支援や教育活動のさらなる充実につながった。そして、地域との一体感の醸成や子どもの願いを叶えるコミスクのよさを実感できている。
○　子どもたちが、学校生活や地域での暮らしに幸せを感じている。
○　地域連携を教育課程に位置付けたことで、地域の教育資源を活用した授業づくりが進み、教員の地域連携意識の高揚が見られた。

【課題と今後の取組】

　ある話し合いの時、地域の人から子どもたちに、「みんなに来たいと思えるような学校をつくっていかないといけないね。」と声がかかった。まさに、自慢の学校をつくるのは子ども自身だと感じた。その成長を保証する意味で、支えてくれる家庭や地域の先導役となる学校の使命を痛感した。今後、コミスクで学び、コミスクで育てられた子どもたちが、いつまでも豊かな生活を送ることができる持続可能な地域社会の創り手となる大人に成長することを願い、人づくりと地域づくりを実現する学校づくりを継続していきたい。